



Title	「殺狗勸夫」物語の研究 : 中国戯曲における犬文化から [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	呉, 秀娟
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15068号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85474
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Xiujuan_Wu_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 呉 秀娟

審査委員 主査 特任教授 武 田 雅 哉
副査 准教授 田 村 容 子
副査 教授 吉 開 将 人

学位論文題名

「殺狗勸夫」物語の研究——中国戯曲における犬文化から

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、中国の犬文化研究という大きな視野のもとで、筆者が「殺狗勸夫」（犬を殺して夫をいさめる）物語と総称する二つの戯曲（演劇）、すなわち、元代の雑劇『殺狗勸夫』、および元末明初の南戯『殺狗記』に対する文化史的考察を試みたものである。

南戯の『殺狗記』は、『荊釵記』『白兔記』『拜月亭』と並んで、四大南戯と称される初期南曲の代表作であるが、これを犬文化という観点から論じた先行研究はきわめて少なく、特に、殺されて人に偽装される動物がなぜ犬なのかという疑問に言及したものはほぼ皆無ながら、わずかに「犬殺しが羊殺しであっても差し支えない」とする蘇涵氏の説と、「犬殺しは古来の風俗を抛り所としている」とする王政氏の説が提示されていた。

呉氏は、殺された動物が犬であることには必然性があったとする立場に立ち、中国の犬文化に関わる文献を渉猟して、分析、考察を進め、「殺狗勸夫」物語において犬が選ばれた背景について、いくつかの回答を提示している。

本論文の成果は、中国の動物文化史の成果を、古典戯曲研究の分野に導入したことであり、従来、このような視点による戯曲研究は皆無であった。これは、犬がきわめて重要なモチーフとなっているはずの「殺狗勸夫」物語の分析方法として、まったくの盲点であったといえよう。呉氏は、中国の史書や小説から、犬の怪異、特に氏が「犬服妖」と命名する、犬が人の衣服を着るという怪異譚を整理し、この戯曲との関連性を示唆する。氏はまた、研究対象が戯曲であることから、演劇における動物の表現方法、あるいは動物の使用についての歴史をまとめ、戯曲における動物というもののありかたをも整理している。これら複数の視点から得られた諸成果を統合した結果として、「殺狗勸夫」物語が、なぜ「犬」をモチーフとしたのかという疑問に、「犬」でなければならなかったことの蓋然性を提示している。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は、中国の物語における犬の使われかたという新境地を開拓したものであり、特に戯曲「殺狗勸夫」の「犬殺し」問題の分析を一步前進させた研究として評価されるものである。

審査の過程において、以下のような問題点と課題が指摘された。

使用する資料の版本についての説明が足りず、異本についても言及がないこと。資料の提示のしかたや書誌情報が恣意的であり、孫引きに依存する傾向もあること。先行研究に対する呉氏の意見が明瞭さに欠けること、などである。さらに審査委員からは、研究対象とする戯曲作品についても、

また犬文化についても、地域性に留意する必要があるのではないか、呉氏の主要な関心が「犬文化」にあるのか、「戯曲」にあるのか、立脚点が明瞭に伝わるように、論文全体の構成や叙述を工夫すべきではないか、などの意見が提示された。

口頭試問においては、呉氏はこれら提示された問題点について、十分納得し、今後の作業によって修正する意志のあることが確認された。これらの課題は、今後の研究の進展と、叙述にメリハリをつけるなど、さらなる洗練を経ることによって解消しうるものであり、本論文の本質的な意義を損なうものではないと思われる。

以上の審査結果から、本審査委員会は、全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。